Richesse Oblige

リシェス・オブリージュの精神

Vol.1

【富の品格】

Responsible wealth elevates dignity

Warren Buffett
ウォーレン・バフェット

Michael Bloomberg
マイケル・ブルームバーグ

Melinda Gates
メリンダ・ゲイツ
Bill Gates
ビル・ゲイツ

1 世界一の投資家ともよばれるウォーレン・バフェット。2 第108代ニューヨーク市長であり、大富豪でもあるマイケル・ブルームバーグ。3 ビル＆メリンダ・ゲイツ夫妻。4 アビー・ロックフェラーらのソーシャライツの尽力で創立された、ニューヨーク近代美術館

社会に階級が存在した時代、アッパークラスには「ノーブレス・オブリージュ」が課せられていました。
クラス社会が（表向きは）なくなった現在、その自己犠牲の精神は富裕層に引き継がれています。
社会に貢献することで、なされた莫大な富とそれがもたらす地位に、品格が備わっていくのです。

Text : KAORI NAKANO　Realization : KAZUHIRO NONAKA
文／中野香織

中野香織
Kaori Nakano
なかの・かおり●エッセイスト、服飾史家。過去2000年分のファッション史から最新モード事情まで、幅広い視野から研究、執筆、レクチャーを行っている。東京大学大学院修了、英国ケンブリッジ大学客員研究員を経て文筆家。2008年より、明治大学 国際日本学部 特任教授を務めている。中野香織ブログ／http://nakanokaori.cocolog-nifty.com/

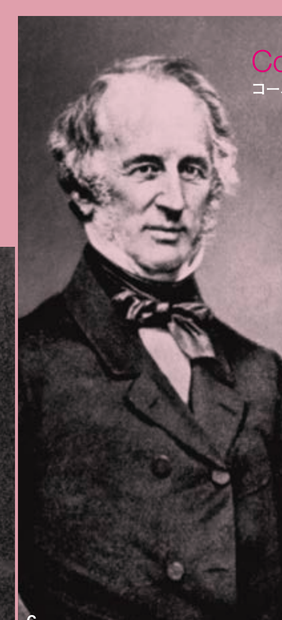
自己犠牲→尊敬→品格というプラスのスパイラル作用

天は人の上に人を造らず。人は生まれながらに平等である。富や社会的地位の「上」「下」格差など、その人自身の、人としての価値とは無関係である。

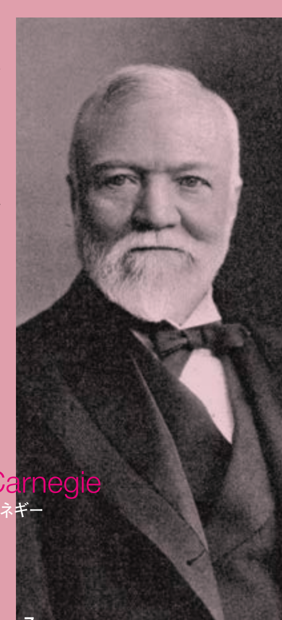
しかし、現実には、さまざまな要因によって生じた社会的地位や富の格差が、多かれ少なかれ、人の心やふるまいに何らかの影響を及ぼし、その結果、「人としての格」の違いまで生んでしまうことがある。

例えばイギリスは、階級社会である。表向きは「クラスレス（階級なき）社会」がうたわれるようになったといえども、出自や経済的な基盤や教育によって、ジェントルマン階級（アッパークラス）と、非ジェントルマン階級（ノン・アッパークラス）とに漠然と分けられる、ゆるやかな階級社会が連綿と続いてきた。それぞれの階級に特有の心の動きがあり、それが階級にふさわしい言葉やふるまいを生み、独特の文化を醸成し、ひいてはその文化が「人」を造っていく。

階級に特有の発想にはさまざまなものがあるが、例えば、アッパークラスが背負うものに「ノーブレス・オブリージュ」という考え方がある。「高貴なる身分には義務がともなう」という意味で、貴族は国家が危機に面したら率先して最前線で闘わなくてはならないという、貴族に自発的自己犠牲を求める暗黙の社会的圧力である。日頃は特権や贅沢を享受していても、いざとなれば最前線で身を挺して闘い、私財をなげうって国を守る。貴族がそのように自己犠牲的にふるまうことで、特権を持たない人々との釣り合いが保たれるようなところがあり、だからこそ、社会が分裂することなく階級制度が何百年も保たれてきたのである。また、貴族が公共の利益のためにヒロイックに行動すれば、周囲からの尊敬や称賛を勝ち得るようになり、彼らはそのような視線に値する言動を意識するようになる。結果として、いっそう地位にふさわしい品格が貴族に備わっていった……という事実も見逃すことはできない。


Cornelius Vanderbilt
コーネリアス・ヴァンダービルト

John D. Rockefeller
ジョン・D・ロックフェラー


Andrew Carnegie
アンドリュー・カーネギー

5 大学やディズニーのキャラクターにも名を残したロックフェラー。6 ヴァンダービルトも大学を寄贈した。7「富を持って死ぬことは不名誉である」と語ったカーネギー。音楽ホールや技術学校（後に大学）を設立

社会全体で、富裕層の資産の使い方に目を光らせるアメリカ

現代において、「ノーブレス・オブリージュ」の精神が最もわかりやすい形で見られる国は、皮肉なことに、建前上、階級制度など存在せず万人が平等であることになっているアメリカかもしれない。巨万の富を築き、名声を獲得したら、社会に富を分配し、慈善活動を行う、という成功者の行動様式は、もはやアメリカが誇る伝統のひとつになっている。古くは石油ビジネスで財をなしたジョン・ディヴィソン・ロックフェラー。鋼鉄王アンドリュー・カーネギー。鉄道王コーネリアス・ヴァンダービルト……。彼らは政府を介さず財産を公共の利益のために投じ、それによって社会の安定と国の繁栄に一役買うばかりか、尊敬に値する偉人として、財団や建物の名前と共に歴史に名を刻んでいる。

富裕層によるこのような義務の遂行、いわばリシェス・オブリージュは、今では成功者の自発的な自己犠牲によるものというよりはむしろ、半ば社会からの無言の強制に近いのではないかと見えることもある。災害時の寄付金のランキング発表などがその最たる例だろうか。企業の社会的責任遂行（CSR）が大きな関心事項になっていることからも察せられるように、社会全体で富裕層の資産の使い方に目を光らせるという文化が、アメリカではすでに形成されているように見受けられるのである。

1 Abaca/AFLO　2,5 AP/AFLO　3 REX FEATURES/AFLO　4 Tomii Yoshio/AFLO　6 Ullstein bild/AFLO　7 picture alliance/AFLO

ビジネスセンスを取り入れた ビル・ゲイツの今日的慈善事業

とはいえ、そのようなアメリカ的なリシェス・オブリージュのあり方こそが、世界から嫉妬や敵意ではなく敬意を受けるアメリカの富裕層のイメージを形成する一助となっているのも確か。なかでも、伝統の王道を歩みながらも、現代的な関心を喚起し続ける刺激的な富の配分を行うことで、常に話題の最前線にいるのが、ビル・ゲイツである。

『フォーブス』誌の富豪ランキングにおいて1994年から2006年まで13年連続トップを独走した、世界中に名を知られた大富豪。2000年には夫人との連名で、ビル&メリンダ・ゲイツ財団を設立。2006年には投資家ウォーレン・バフェットから300億ドルにのぼる寄付を受けて規模を倍増させる。2008年にはマイクロソフトの経営第一線から退いて慈善事業に専念すると発表してそれを実行。途上国の医療問題や教育水準の改善などに精力的に取り組んでいる。

ゲイツの慈善事業が一目置かれるのは、それが「富裕になったから引退して慈善事業でも」というような余生の暇つぶし的なにおいがまったくしないためである。現代的な起業スピリットとビジネスセンスを駆使して行われる、現役感溢れるシリアスな一大事業であり、その点がきわめて若々しく刺激的なのである。

例えば、財団は株式などの投資を行う外部の投資チームに運用を任せ、資産は毎年殖え続けているのだが、2006年にゲイツは、夫妻の死後50年以内に財団の資産を使い切って活動を終える、と発表している。財団の存続期間を限定した理由は、「我々が取り組んでいる問題を今世紀中にめざましく進展させるため」。期間を限定することによって問題に集中的に取り組み、確かな結果を出す。そこに慈善事業もまたシビアなビジネスの視点でとらえる、冷静な計画性を感じ取ることができる。

また、ビル・ゲイツとウォーレン・バフェット、二人の資産を合わせると900億ドル（7・7兆円）になると報じられているが、彼らはさらに、アメリカのほかの億万長者も巻き込むことで、宣伝活動も大々的に行っている。この二人の説得により、すでに40名近くの富豪が財産の多くを寄付するという誓約書にサインしているが、そのなかにはニューヨーク市長マイケル・ブルームバーグ、パラマウント映画・20世紀フォックスのバリー・ディラー、石油王T・ブーン・ピッケンズ、メディア王テッド・ターナー、映画監督ジョージ・ルーカス、投資家ロナルド・ペレルマンらの名前も見出すことができる。大半が資産の50%を手放すと約束し、バフェットにいたっては99%の財産を寄付するとのこと。多く手放したほうが勝ち、の豪勢な競争にも見えてくるが、このような耳目を集める話題をふりまいていくことで、慈善活動そのものへの関心が高まる仕掛け。ここにもビジネスライクなパブリシティの手法が貫かれているのである。

得意分野のビジネスを展開する手法で、慈善事業を展開する。しかも、その事業がうまくいけばいくほど社会は向上し、人々からは敬意を集め、名声は高まる。来世に富は持っていけないけれど、公のために善をなしたという記憶は人々の中に永遠に残り、末永く影響力を発揮し続ける。つまり、財産とエネルギーを効果的に慈善に投じることで、彼らは、億万の富なんぞよりもはるかに大きな力を獲得しているわけである。

このようなアメリカの大富豪の姿勢に続いて、↙いるのが、アジアの富豪である。中国でも、台湾でも、個人財産のほとんどを寄付し、子どもに相続させないというケースが続々報じられている。ジャッキー・チェンもまた、全財産をチャリティへ寄付すると宣言している一人である。自分より能力があれば自らの力で富を築けるはず、という子孫への深い信頼がその行動を後押しする。

アメリカで〝上流〟となるには 社会への影響力が不可欠

莫大な富を社会へ還元することで、結果としてより大きなパワーを獲得し、没後も末永くその力を発揮し続けることができた例は、何も直接的な慈善活動だけにとどまらない。美術品を購入し、そのコレクションをもとに美術館をつくる。このような文化的な貢献もまた、リシェス・オブリージュの模範例である。実際、アメリカの多くの美術館は、女性の大富豪による、国を介さない個人的なパトロネージュから生まれている。

例えば、ボストンにあるイザベラ・スチュワート・ガードナー美術館。ヴェネツィアのバルバロ邸から影響を受けた建物の中には、父の巨額の遺産を相続してから熱心に美術品の収集を始めたイザベラのコレクションが収められている。著名な西洋絵画や西洋彫刻と、まったく異なる文化や時代の絵画、調度品、織物などが自然に調和するユニークで趣味性の高い空間は、一個人が創設した美術館ならでは。彼女の存命中、ギャラリーは「フェンウェイコート」とよばれ、同時代の芸術家たちにも多大な影響を与えてきた。

また、ホイットニー美術館をつくったのも、ガートルード・ヴァンダービルト・ホイットニーという女性の富豪である。鉄道王コーネリアス・ヴァンダービルトの曾孫にあたる。ガートルードはありあまる富を芸術家たちの支援のために注いできたのだが、なかでも名高いのは、若い芸術家たちの作品を展示する場所として開いたマンハッタンのホイットニー・スタジオ・クラブである。このクラブこそ、ホイットニー美術館の前身にほかならない。彼女の没後、美術館の運営は娘のフローラが引き継いだ。

ニューヨークの近代美術館「MoMA」もまた、3人の「むこうみずな（darring）」女性のソーシャライツの行動力の賜物である。ロックフェラーⅡ世夫人のアビー・ロックフェラー、メアリー・クイン・サリヴァン、そしてリリー・プリス。美術を愛し、貧困問題や公民運動などにも取り組んだ進歩的な彼女たちの名は、称賛と共に今も語り継がれている。

美術館創設に貢献した女性富豪たちの共通点は、美しいものを見極める鑑識眼をもち、豊かな人脈の力を最大限に生かす社交力を駆使して、潤沢な資産とエネルギーを自分が信じる美と文化のために注いだこと。その結果、後世の人々からも敬意と称賛を捧げられ、今なお美術史にその名を刻んで輝かしい影響力を発揮し続けていることに注目したい。

このようなアメリカのリシェス・オブリージュの実例の数々からわかることは、富は使い方次第で、額面以上の、というよりもむしろ額面計算など足もとにも及ばないパワーを発揮するということ。一見、自己犠牲とも見えるような富とエネルギーの使い方を工夫することで、人は、大きな社会的パワーを獲得し、そのパワーが何倍にも返ってきて、その人に品格と永遠の輝きを与えていくのである。そのときこそが、人として「上流」と呼ばれるにふさわしいときであり、ひいては確かな幸福を実感できるときであることを、かつて「ノーブレス・オブリージュ」を実践した貴族たちは、誇りとともに知り抜いていたはずである。

Isabella Stewart Gardner
イザベラ・スチュワート・ガードナー

Gertrude Vanderbilt Whitney
ガートルード・ヴァンダービルト・ホイットニー

5 鉄道王ヴァンダービルトの曾孫で、本人も彫刻家のガートルード。彼女が設立したホイットニー美術館は、アメリカ近現代美術が充実。6 巨額の遺産を元手に、珠玉のヨーロッパ美術品を収集したガードナー夫人。7 ロックフェラー2世の妻、アビー・ロックフェラー

Ronald Perelman
ロナルド・ペレルマン

1 過去の富裕層に倣い、財団を設立したビル・ゲイツ夫妻。しかしその運営術は従来にない、刺激的で大胆なもの。2 メディア界の大物バリー・ディラー。3 商業的に最も成功した映画監督のひとり、ジョージ・ルーカス。4 大型の企業買収を複数手がける、投資家のロナルド・ペレルマン

Barry Diller
バリー・ディラー

George Lucas
ジョージ・ルーカス

8、9 アビー・ロックフェラー、メアリー・クイン・サリバン、リリー・プリスの3名により発案されたニューヨーク近代美術館。現在の建物は日本人建築家、谷口吉生の設計。10 ガードナー美術館は夫人が1年間かけて慎重に展示品をレイアウトした。11 展覧会のオープニングやチャリティイベントとして、美術館で華やかなパーティが催されることも多い。12 メトロポリタン美術館に寄付の申し出を断られた、ガートルードの現代美術コレクションを基に創立されたホイットニー美術館。13 アメリカのヨーロッパへの憧憬が詰まったガードナー美術館

1 Fred Watkins/Disney ABC Television Group/ABC via Getty Images 2 Gary Gershoff/Wireimage 3 Jeff Kravitz/FilmMagic 4 Christopher Peterson/Bloomberg/Getty Images 5 Bert Morgan/Premium Archive/Getty Images 6 Top Foto/AFLO 7 Everett Collection/AFLO 8、9 Tomo Yoshio/AFLO 10、12 Alamy/AFLO 11 Jason Kempin/Wireimage 13 SIME/AFLO